

# FORUM

Vol.5

大阪府立大学  
高等教育開発センターニュース

「フォーラム」

## 第5号

### CONTENTS

● 巻頭言 ..... 2

大阪府立大学理事  
経営担当 北條圭一

● FDセミナー(2006年度第2回)報告 ..... 3

● 授業アンケート報告 ..... 4

—実施概要と試行的分析ハイライト—

● 「先導的大学の改革推進委託」 ..... 6

(文部科学省委託調査研究) 中間報告

● 編集後記 ..... 8



大阪府立大学  
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

# 巻頭言

● 大阪府立大学理事  
(経営担当)

北條圭一

KEIICHI HOJO

巻頭言の要請を受けた。教育の実際に関わったことがない、と言う思い等からの断りと、一方では、この『FORUM』の位置付けや、三位一体(教・職・学生)でのFD活動を考えれば、受けざるを得ないと言う思いとが交錯したが、いずれは受けることになると思う諦め(?)の気持ちで、ことの重さも弁えずに、了解した次第です。

このことによって、今後更に多様な情報発信や提案・意見交換が行われ、間口が広がり、少しなりとも教育の充実・改善に寄与出来るとするならば、これはこれで一つの意義があるのでは、と思っております。

前置きはこれ位にして、本学は、凡そ1,500人の学生を世に送り出している。(別に進学500人)

まずは、受け入れ側の企業はどうだろうか。生き残り競争を掛け、今や大が小を飲み込むのではなく、スピードの速い企業が遅い先を飲み込み、選択と集中にM&Aを加え、企業自身が大きく変身する時代へと動いている。

この為、企業は、常に仕事の担当範囲を広げ、変えたりする。これは、大学で学んだ専門知識が、そのまま仕事に全て活きるとは限らない、ことを意味する。

従って、社会へ出てからも、能動的に、

学際領域や専門外の知識を習得し、それらを応用・活用する努力が欠かせない。勿論、課題設定・解決能力、プレゼン力は必須である。

当然だが、企業は、専門頭脳を採用するのではなく、専門性を備えた『やる気ある総合力・人間力を持った人材』を求めているのである。

送り出す側はどうか。学生と云うキャンパスの一角に、数十人の先生が、教養・専門基礎・専門分野の其々の領域で、かれらが望む(?)高層ビルを建てて、送り出している。建築基準が厳しい程、探究心も強くなり、潰しも利く。

それでは、求められる人材育成の為に、素材の良い残るキャンパスを、どう仕上げようとしているのか。組織的な取り組みはどうか。それとも本人任せなのか、である。

1,500人は高い能力を持った学生である。勝負の場所は、学内ではなく世の中である。足らざるがあれば、少しの手加えで、更なる自立的な成長を期待することが出来る。この結果が、本学の教育力の評価となり、あらゆる面で、本学にプラス還元してくれるものとする。

世の中の変化に対応出来ない企業は、生き残れない、ことは明白な事実であるが、大学はどうであろうか。

REPORT

# FDセミナー (2006年度第2回)

## 報告

高等教育開発センター主催の2006年度第2回 FDセミナーは、2006年度前期の「授業アンケート」の結果について高等教育開発センターからの概要の報告と学生の満足度が高かった先生の中から3名の先生に事例報告という形で、授業での工夫等についてお話していただきました。前回2005年度後期の授業アンケート後のFDセミナーでは、全学共通科目を担当されている先生方に事例報告をしていただきましたが、今回は各部署の専門科目の担当教員にお願いしました。中百舌鳥キャンパスからの発表の先生、遠隔講義システムを使って羽曳野キャンパスからの発表の先生、レジュメの配布のみの発表の先生というバラエティに富んだ発表形式のセミナーとなりました。

なお、第1回FDセミナーと同様に、今年度から、中百舌鳥キャンパスと羽曳野キャンパスを遠隔講義システムで結んでの実施となりました。

日時 2006年10月 2日(月) 18:00～20:00

場所 大阪府立大学  
中百舌鳥キャンパス学術交流会館多目的ホール/  
羽曳野キャンパスL402教室

対象 大阪府立大学教職員、学生

主催者挨拶 佐藤 優子(高等教育開発センター長)

1) 授業アンケート結果の概要報告

保田 卓(高等教育開発センター副主任)

2) 事例報告1 川本 俊治(工学研究科)

3) 事例報告2 石垣 智徳(経済学部)

4) 事例報告3 林 義孝(総合リハビリテーション学部)

始めに、高等教育開発センターの保田副主任から、今回の授業アンケートの概要報告をいたしました。授業アンケートは項目が多岐にわたり、FDセミナーの限られた時間では全体についての詳細な分析報告をすることができませんので、焦点をしばって毎回異なる観点からの分析結果を紹介しています。今回は、1年生と2年生の反応の違いについての報告となりました。1年生と2年生で授業評価に対する反応の違いが際立っている項目があり、また、反応の違いが出る項目が部局によって異なっているということで、部局ごとのデータが紹介されました。今回の報告は各部署での今後の学生への教育の在り方やカリキュラム見直しなどの参考になったのではないのでしょうか。

事例報告では、工学部の川本先生、総合リハビリテーション学部の林先生からの報告がありました。経済学部の石垣先生の報告も行われる予定でしたが、当日都合が悪くなったため講演はキャンセルとなり、資料のみ配布となりました。石垣先生の講義については、大人数講義での授業評価の高い先生の報告ということで期待していただけに大変残念でした。またの機会にぜひお願いしたいと思います。

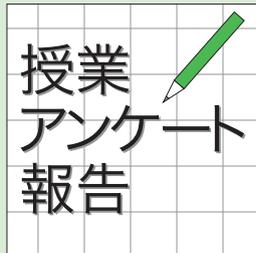
工学部・川本先生からの報告では、米国の大学で教壇に立たれた経験を中心に、米国での学生による授業評価と、その体験にもとづいた先生の授業での工夫についてのお話がありました。米国流の厳しい授業評価をくぐり抜けられた先生ならではの貴重な体験談をうかがうことができました。



林先生の講演は、羽曳野キャンパスから遠隔講義システムで中百舌鳥キャンパスに中継されました。毎朝、新聞に目を通すさいに、テレビ欄をみて、授業に役立つような番組があると必ず録画の予約をする等のエピソードをお話されました。林先生の授業に対する熱意を感じさせるものでした。

今回のFDセミナーにおいては、それぞれの先生が、授業に対して、なにごしかの工夫と努力をしているという点で、参加者は、おおいに参考になったと思います。もちろん、発表された先生方のやり方をすぐに取り入れるというのは、分野や専攻の違いもありますので、難しいことでしょう。しかし、それぞれの先生がユニークに創意と情熱をもって教育にあたっていているという点で、大きな刺激となりました。

(川添・高根)



# —実施概要と 試行的分析ハイライト—

先般実施されました平成18年度前期授業アンケートについてご報告いたします。まず実施概要につきましては、すでに本誌第4号でお知らせしておりますが、結果のご報告の前に再掲しておきます。

対象科目: 平成18年度前期開講科目

※1・2年生科目は全ての科目が対象。3年生以上(大学院生も含む)の科目は各学部(研究科)が指定した科目

回答期間: 平成18年7月10日(月)～8月11日(金)

※ただし集中講義の科目については別途設定

回答方法: 原則として学生ポータルを通じてWeb上で回答

※経済学部の一部の科目では紙ベースで実施

次に、全体と部局別の対象科目数・回答(延べ回答者数)の学年別構成比・回答率は表1の通りです。本来3年生以上が存在しないはずの理学部・人間社会学部に該当があるのは、表中の学部名が学生の所属ではなくアンケート対象科目の開設部局を表すためです。上記のように、今回は対象科目が1・2年次配当科目のほとんどであったため、学年別では1・2年生の回答が、部局別では総合教育研究機構の科目および回答が多くなりました。また、回答率は全体で3割強で、前回の4割弱からも低下しており、今後、改善が必要です。

■ 表1 科目数・回答の学年別構成比・回答率

	科目数	1年生	2年生	3年生	4年生以上	回答率
全体	1087	66.8	21.9	10.2	1.1	32.9
工	213	32.4	47.5	17.5	2.6	17.5
生命環境	89	27.9	37.2	30.6	4.3	16.4
理	71	36.0	59.4	3.1	1.5	23.2
経 済*	52	69.1	23.2	6.4	1.2	24.9
人間社会	210	49.0	49.4	1.5	0.1	19.7
看護	52	28.6	27.2	43.8	0.3	38.1
総リハ	56	27.8	31.8	35.9	4.5	63.6
機構	344	90.7	8.6	0.5	0.1	46.5

※ 単位:%(科目数を除く)

\* 学年別構成比・回答率は紙ベース実施の22科目を除く

試行的分析として、今回は特徴的な項目をピックアップしてご紹介いたします。アンケート項目は各部局でかなり異なる部分がありますが、工学部では「この授業に触発されて、さらに深く学習したいと思いませんか?{意欲の促進度}」という項目が設けられています。授業を受けることがその後の学習の意欲をどのようにかきたてるかを知る上で興味深い項目です。工学部では他に「受講前にこの授業に興味を持っていましたか?{期待度}」「授業中に質問、発言、発表するなど意欲的に取り組みましたか?{積極性}」「全体として授業内容と授業方法に満足していますか?{総合満足度}」も問われており、これらの要素が学習意欲の促進にどれくらいつながっているかを、重回帰分析によって調べてみました。その結果が表2です。

■ 表2 工学部「この授業に触発されて、さらに深く学習したいと思いませんか?」を従属変数とした重回帰分析  
(数値は標準化偏回帰係数)

説明変数 (質問項目)	$\beta$
受講前にこの授業に興味を持っていましたか?	.389 ***
授業中に質問、発言、発表するなど意欲的に取り組みましたか?	.116 ***
全体として授業内容と授業方法に満足していますか?	.422 ***
調整済みR自乗	.553
F	761.822 ***
	***p <.001

$\beta$ は標準化偏回帰係数で、各説明変数(質問項目の回答)が従属変数({意欲の促進度}の回答)にそれぞれ統計的にどれほどの規定力があるかを表します。表2からは、今回のアンケート結果による限り、授業後の学習意欲の促進に対する規定力は、授業に対する満足度が最も大きく、受講前の授業に対する興味がそれに続き、授業に対する学生自身の取り組みの積極性は(有意ではあるものの)相対的には最も効果が小さいことがわかります。

受講前の興味を問う質問は理学部でも設定されていますが、授業が触発した興味に関する項目は、授業後の学習意欲ではなく、授業そのものに対する興味を問う「この授業を実際に受講してみて、内容に興味をもてた」となっております。これに関し表2と同様の分析を加えたものが表3です。

■ 表3 理学部「この授業を実際に受講してみて、内容に興味をもてた」を従属変数とした重回帰分析  
(数値は標準化偏回帰係数)

説明変数 (質問項目)	$\beta$
この科目について、受講前から関心や興味があった	.456 ***
授業時間中または授業時間外に担当教員に質問や意見をするなど意欲的にとりくんだ	.113 ***
各週毎の目標や要点が明確に示されるなど、授業をわかりやすくする工夫がなされていた	.416 ***
調整済みR自乗	.641
F	233.787 ***
	***p <.001

理学部では総合満足度に関する項目は設けられていないので、それに最も近いと思われる「各週毎の目標や要点が明確に示されるなど、授業をわかりやすくする工夫がなされていた」を説明変数として投入しております。表3を見ると、 $\beta$ が最も大きいのは受講前の興味・関心で、授業の工夫はそれよりもやや小さい値となっております。この二つの結果だけで確たる解釈を与えることは危険ですが、あえて行くとすれば、授業そのものに対する興味は授業に対する学生の受講前の興味・関心に左右されるところが大きいけれども、授業を履修した後になおその内容を深く学習しようとする意欲については、受講前の興味よりもむしろ、授業を受けてよかったと思えるかどうか(満足度)がカギになると言えるのではないのでしょうか。(保田)

# 「先導的大学改革推進委託」 (文部科学省委託調査研究) 中間報告

前号でも概要をお知らせしましたように、大阪府立大学総合教育研究機構「初年次教育在り方検討委員会」は大阪市立大学大学教育研究センターと連携して、昨年度から「今後の初年次教育の在り方に関する調査研究」というテーマで文部科学省先導的大学改革推進委託を実施しています。既にデータの収集・入力は終わり、現在、高等教育開発センタースタッフを含む各委員が分担して分析を鋭意、進めておりますが、本号では、9月にキャンパスブラザ京都で開催されました日本リメディアル教育学会第2回全国大会で発表した内容(ただし、発表時に指摘を受けた点を修正)のエッセンスをご紹介します。

本委託研究における本学の担当は、①高等学校の学習指導要領改訂による学生の学習履歴・能力・学習意欲の変化の調査および②大学教員の高等学校における学習内容の認知度ならびに高等学校教員の大学教育(特に初年次教育内容)の認知度の調査ですが、学会では①に関し、その時点で利用可能であった府大生調査データ(高校時代の学習の履歴・意欲・習慣などを調査した結果およびベネッセGTEC英語力テスト等の学力データ)の分析結果を発表いたしました。

## □ 調査の概要

### (1) 「学習状況等に関する調査」

府大1・2年生を対象とし、学生ポータルを通じてWeb上のアンケート・システムを用いて実施。調査期間は平成18年4月17日～6月9日、回答率は35.7%。

### (2) GTEC英語力テスト

1年生配当「英語I」の全クラスを対象に初回授業(一部、授業とは別途)に実施。

### (3) 数学学力調査

国立教育政策研究所の「平成14年度高等学校教育課程実施状況調査」を基に作成した学力調査を、理系学部1年生を対象として数学授業の初回に実施。

## □ 分析の方法

前述の課題①高等学校の学習指導要領改訂による学生の学習履歴・能力・学習意欲の変化の調査については、以上の大学生データのみによっても限定的ながら検証することができます。というのは、平成18年入学生(1年生)のうち同年高校卒業生の高校入学年は(高校で留年していないという前提の下では)平成15年であり、いわゆる新課程で高校教育を受けたこととなりますが、それ以外は旧課程の卒業生だからです。ただし次の制約があります。①データは府大生に限られたものであり、そこから得られた知見を直ちには大学生や高校卒業生全体に一般化できません。②調査の準備期間が限られていたためWebによる調査としたが、おそらくそのせいもあって回答率が高くありません。③高校時代の学習を尋ねる調査については、大学入学後から記憶を遡って答える回顧的調査となるため、高校時代の学習の実態からは乖離している可能性があります。④学力については1年生データのみを用いることとしますが、GTEC英語力試験と数学学力調査は入学直後に行っており、入試データともども大学入学後の学力変化はほぼ無視できるとはいえ、平成17年高校卒業生については卒業後1年間の入試準備期間を経ており、平成18年卒業生との比較には注意を要します。以上の4点に留意した上で、学習指導要領改訂とは無関係な要因をできるだけ排除するため、ここでは平成17年および18年の入学生(つまり2年生と1年生)のうち現役生のみを抽出して比較します。

## □ 結果

高3の1学期(または前期)の学習時間(学校・予備校等の授業時間を除く)

平日(表1)・休日(表2)とも公立高校出身者のみ平成18年入学生(現役1年生)の方が長い傾向が認められました。

## 高校時代の英語学習の印象

元の六択式の設問を「授業内容はほぼ理解できていた」「授業に少しわからないところがあった」「授業についていけなかった」に再コード化して学年に

表1 高校卒業年と高3(1学期または前期)の学習時間(平日)との関連

		学習時間	H17	H18
公立	3時間程度以上		29.2%	35.6%
	1時間程度or2時間程度		47.2%	48.2%
	ほとんどしないor30分程度		23.6%	16.2%
	計		100.0%	100.0%
			N=525, $\tau_c=.065$ , $p < .10$	
私立	3時間程度以上		30.2%	36.0%
	1時間程度or2時間程度		46.5%	48.1%
	ほとんどしないor30分程度		23.3%	15.9%
	計		100.0%	100.0%
			N=232, $\tau_c=.058$ , $p=.30$	

表2 高校卒業年と高3(1学期または前期)の学習時間(休日)との関連

		学習時間	H17	H18
公立	5時間程度以上		27.4%	28.6%
	2時間程度~4時間程度		40.6%	49.2%
	ほとんどしない~1時間程度		32.1%	22.2%
	計		100.0%	100.0%
			N=525, $\chi^2=4.78$ , $p < .10$	
私立	5時間程度以上		27.9%	33.9%
	2時間程度~4時間程度		39.5%	42.9%
	ほとんどしない~1時間程度		32.6%	23.3%
	計		100.0%	100.0%
			N=232, $\chi^2=1.68$ , $p=.43$	

よる分布の差を調べたところ、公立高校出身者では平成18年入学生(現役1年生)の方が主観的な理解度が高いのに対し、私立出身者では逆の傾向が見られました(表3)。

表3 高校卒業年と高校時代の英語の印象との関連

		英語の印象	H17	H18
公立	授業内容はほぼ理解できていた		53.8%	67.1%
	授業に少しわからないところがあった		34.9%	25.8%
	授業についていけなかった		11.3%	7.2%
	計		100.0%	100.0%
			N=525, $\chi^2=6.71$ , $p < .05$	
私立	授業内容はほぼ理解できていた		79.1%	59.8%
	授業に少しわからないところがあった		14.0%	28.6%
	授業についていけなかった		7.0%	11.6%
	計		100.0%	100.0%
			N=232, $\chi^2=5.66$ , $p < .10$	

#### 大学入学時点の学力

前述の通り1年生データのみを用いました。GTEC英語力テストのリーディングおよびリスニング、数学学力調査、センター試験の国語・数学IA・数学II B・英語・英語リスニングの得点について高校卒業年別の平均値を算出したところ、GTECリスニング(N=761 ;H17卒 :198.3, H18卒 :206.2 ;t=2.98,  $p < .01$ )、数学IIB(N=759 ;H17卒 :79.2, H18卒 :74.9 ;t=3.91,  $p < .01$ )および英語リスニング(N=650 ;H17卒 :40.8, H18卒 :42.4 ;t=3.83,  $p < .01$ )で有意差が見られました。

#### □ 考 察

第一に、高3の1学期(または前期)の学習時間が公立高校出身者のみ現役1年生で長い傾向が認められたことは、学習指導要領改訂により授業時数や学習内容が縮減され、その影響がより大きいと思われる公立高でのみ、それを補う形で授業外の自主学習時間が長くなったと解釈することができます。ただし分布の数値は(有意性の差はあるものの)公立と私立で非常に似通っており、回答者数が公立の

方が私立より多いことによる可能性を否定できません。

第二に、英語授業の主観的な理解度が、公立高では現役1年生の方が現役2年生よりも高かったのに対し、私立高ではその逆の傾向が認められました。公立高に関しては、これも新学習指導要領で学習内容が削減されたぶん授業に余裕ができ、理解できる生徒が多くなったと解釈できます。私立については一概に解釈しがたいですが、少子化一学校間競争激化時代を迎え、私立では進学実績を上げるために授業内容をレベルアップさせていることも考えられます。

第三に、大学入学時点の学力について、リスニングでは平成18年卒の1年生の方が高く、センター試験の数学IIBでは逆に平成17年卒の方が高いという結果が得られました。リスニングに関してはセンター試験におけるリスニング問題導入の影響と捉えることができます。数学IIBについては、平成17年卒は18年卒よりも受験準備学習を1年長く行っているためとも考えられますが、他の科目では差が見られないことから、これも学習指導要領改訂の結果と捉えられなくもありません。というのは、数学における同改訂では学習内容はさほど削減されておらず、むしろ中学段階で削減された内容が高校に先送りされているために、高次学年で履修することの多い数学IIBに皺寄せがかかり、学習に十分な時間が取れなくなっていることが既に指摘されているからです。

先にも述べましたように、上記の結果は府大生に限定されたものであるため性急な一般化は慎まなければなりません。現在作業中の高校生データとの比較分析が進めば、より確度の高い情報が得られることが期待されます。次号では、この点も含めて今回の調査全体の結果からご報告いたします。

(保田)

## 編集後記

高等教育開発センターよりお届けする『FORUM』も今回で第5号となりました。本センターは今年がまだ発足2年目、本学のFD活動はまだまだ遅れている面があるとは思いますが、それでも皆様方のご協力をいただくことにより、一步一步着実に前進しております。今年度は、FDセミナーの開催と授業アンケートの実施に加え、つい先日(11月25日)のことですが、初めての試みとして、「FDワークショップ」(教員参加型研修会)を開催することもできました。その詳しい報告は次号(第6号)でさせていただくことができるかと思っております。

教員という仕事につく人ならば、口には出さずとも、「いい授業をしたい」という意欲は必ず持っているはず。FDというのは、管理や強制によって実現できるものではなくて、一人一人の教員の意欲をいかにうまく実践につなげていただくかという問題だと思います。センターでは今後もさまざまな新しい企画にとりくんでまいりますので、より一層のご理解とご協力を賜りますよう、よろしく願い致します。

(谷口)

### 大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース“FORUM”

平成18年12月20日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学  
総合教育研究機構 高等教育開発センター  
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1  
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>

印刷所 くすの木印刷  
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21